

## 取組概要

2023年3月10日

(あて先)

埼玉県立大学 学長

星 文彦 様

被推薦者 所属学科 共通教育科

氏 名 森 正樹

私の取組は次のとおりです。

### I めざす教育実践

本学学生が、将来、専門的職業人として自立的かつ共同的に活動し、社会への貢献を通じて自己実現することを願い、その基盤となる能力や態度を重視した教育を目指しています。ここ数年の担当科目では、特に、以下の諸点を重視しています。

- ①学生が主体的に授業に参加し、考え、課題解決する体験を用意する。
- ②知識を獲得するだけでなく、それをを用いて深く考える体験を用意する。
- ③一方的指導ではなく、学生と教員間の対話を重視し、相互作用を促進する。
- ④学生同士が相互作用を通じて、共同的・互恵的に学び合う体験を用意する。
- ⑤成功体験を重視し、学生の動機づけと自己効力感を高める。
- ⑥各専門分野への関心は勿論、人間や社会への関心と共感を大切にする。
- ⑦教員自身の研究活動と社会貢献の成果を授業内容や教材に反映させる。
- ⑧コロナ禍の制約の下でも教育の質を維持・向上するため授業改善に取り組む。

(⑧は2020年度～)

〈学部担当科目〉

「特別支援教育」「発達障害論」「人間発達学」「教育心理学」

「特別な教育・保育ニーズの理解とその支援」「カウンセリング技法」

「子ども家庭支援の心理学」「教育相談」「ヒューマンケア体験実習」他

〈大学院担当科目〉「コンサルテーション論」

### II 教育実践の概要

上記諸点(①～⑧)を日々の教育実践で実現する方途として、次の取り組みを行ってきました。

## ■ 1 コロナ禍で学生の孤立を防ぐ工夫と配慮

コロナ禍で、本学学生は様々な制約の下での生活や学習を余儀なくされてきました。そこで2020年度より、本学の教員との情報交換を進めながら、学生の不安の軽減や、孤立感や疎外感及び閉塞感を軽減する方途を模索してきました。

### ① 学生に教員を「身近に」感じてもらうための工夫

学生が教員を身近な存在と感じるように、適度な自己開示を心がけています。自己紹介を行うとともに、意図的に自らの個性や人柄を示すように心がけています。自身の趣味（写真・イラスト・プラモデル）の話をした上で、後日、それを資料の挿絵に使用しました。教員自身の生活体験を語り、これに関連付けながら諸理論や専門用語の解説を試みました。ユーモアのある話題を交えながら授業を進め、学生が教員に親しみを感じ、躊躇なくコミュニケーションできるようにしています。

また自身を、「高所から」授業をする教員ではなく、自ら「歩み寄る」存在として、学生に印象付ける工夫を続けています。そのひとつが「机間指導」です。一斉授業にあっても、ひとりひとりに語りかける口調、振る舞いを大切にしています。

### ② 学生と教員が言葉を交わす機会の確保

対面授業とオンライン授業の双方で、できるかぎり、学生の「名前を呼ぶ」よう心がけました。小・中規模の授業では、敢えて呼名により出欠確認を行なっています。また教員からの発問を工夫し、教員と学生が対話する機会を大切にしています。

なお、長く遠隔授業が中心であったため、対面授業の再開後に発言に緊張する学生の存在も想定されました。また、一定数、評価不安の高い学生もいます。

そこで、緊張や不安軽減を図るため、（回答の正誤は問わず）学生の発言自体を「授業への協力」とみなし、これを積極的に評価し、肯定的かつ支持的に接するように心がけています。また、学内メールでの連絡や返信も、極力、無機的なものにならないように、簡潔に温かいメッセージを添えることもあります。

### ③ 教員自身のコミュニケーションの工夫

マスクを着用した状態での対面授業では、教員からの非言語性の情報伝達に制約が生じることが避けられません。そこで教員自ら、非言語性のコミュニケーションをモニタリングして、これを自覚的に調整しています。例えば、身振りや表情の変化、声の抑揚等をより明瞭でメリハリあるものにするよう留意しています。

### ④ 学生同士の交流と相互作用の促進

授業でグループワークやペアワークを採り入れています。ここで、適宜、学生同士の自己紹介など相互理解の機会を設けています。さらに、教員自身が各グループを巡視し、ファシリテーションを行なってきました。こうして、共同的な学習を促進するとともに、学生同士の相互作用の媒介者となることを意図しています。

## ■ 2 授業改善の取り組み

## ①授業用事例集の作成と活用

担当科目には、幼児や児童生徒の実態、教育現場や保育現場の実践的課題に関連する学習内容が多く含まれています。しかし、学部での養成段階の学生が、こうした諸課題を具体的にイメージしながら学習を進めるためには、授業の進め方や教材等に工夫を要すると考えられました。

そこで、事例集を独自に作成・編集し（架空の創作事例）、授業で活用しています。ここには架空のストーリーが設定され、登場人物の語りを簡潔かつ具体的に記載しました。これに併せ、事例検討用のワークシートも作成しました。これは、学生グループが検討のプロセスを自立的かつ段階的に辿れるようにデザインしたものです。これらを用いたグループワークで、学生の皆さんは専門職に求められる心構えや観点、具体的な支援の手立てを積極的に発表しています。

なおこの事例集は、ここ十余年、加筆修正や増補を重ね（現在 43 事例）、現職教員や保育士の皆さんを対象とする講演や研修会でも活用しています。

※注 「事例集」は、実在人物や特定機関のエピソードを収集したものではありません。

## ②授業へのロールプレイの導入

今日、学校教育の現場では、発達障害等により特別なニーズを有する子ども達への支援が進められています。ここでは、学校内外の専門家同士との連携が必要です。特に、本学が養成する養護教諭は、こうした連携において重要な主導的な役割を担うことが期待されています。そこで授業では、こうした校内外の連携を実践的に学ぶロールプレイを採り入れています。校内のケース会議を想定して、学生が各自の役割を担い、共同的な課題解決を疑似体験する機会を設けています。

さらに授業では、学んだ知識を、学生が自らの言動に関連付ける視点や発想を重視しています。そのため、教員自ら、児童生徒の役を演じて見せて、「あなたならどう応じる？」と学生に問いかけることもあります。

## ③指導技術としての「発問」を指導技術に位置づける

教員から学生への問いかけ、つまり「発問」を重視し、重要な指導技術に位置づけています。発問により、学生の授業への積極参加を促しています。さらに、学生の思考や問題解決のプロセスの援助、学習内容のより深い理解を目指しています。授業における発問の主たるねらいは次の諸点です。

- ・ 学習内容をより応用的かつ実践的に用いる観点を提供する。
- ・ 学習内容を身近な体験や人間の姿に結びつけて理解する観点を提供する。
- ・ 学生がまだ気づかない、新たな思考の観点や枠組みを提供する。
- ・ より多面的で柔軟な思考にリフレーミングする。
- ・ 学生の興味や動機づけを高め、主体的な学習を促進する。
- ・ メタ認知を促進し、「考え方について考える」機会を提供する。
- ・ 学生同士で、他者の多様な視点や発想に気づく機会を提供する。
- ・ 探求的姿勢（問いを立てること）の重要性を学生に示すこと等です。

以下、表1にこれまでの授業で用いたことのある発問のサンプル及び授業科目名を示します。発問は、授業に先立ち予め準備する場合がありますが、学生の反応を見て、授業の展開の中で発想する場合があります。

表1 授業場面における発問（例）

発問例	科目名
1 保育園(年長児)の砂場遊びと、会社経営の共通点とは？	人間発達学
2 思春期の生徒が「ハイハイ！」と授業で手を挙げなくなるのはなぜ？	人間発達学
3 小学生まではパパ大好き。中学生になったらなぜ親がうざいのか？	人間発達学
4 テストが100点なのに、端を折り返して隠す子がいるのはなぜ？	人間発達学
5 保育士の指示が通らない子、考えられる背景は？	障害児保育
6 子どもがお手伝いが大好きなのは何故？	障害児保育
7 「先生、ここが分かりません」と質問できるのはどうして？	教育心理学
8 授業中に居眠りする中学生、考えられる背景はいくつある？	教育心理学
9 暗算・黒板の視写・音読・長文読解、ワーキングメモリが必要なものは？	教育心理学
10 今やろうという時に「勉強しろ」と言われ、やる気が失せるのは？	教育心理学
11 「忘れ物」が多い児童生徒を、頭ごなしに叱っていけないのはなぜ？	教育相談
12 不登校の生徒が放課後に学校に顔を出した。あなたは何と声かけする？	教育相談
13 授業中にわざと汚い言葉をいう児童に、あなたはどう関わりますか？	特別支援教育
14 二次障害の防止のために教師ができることは？	特別支援教育
15 発達障害の児童の支援、連携可能な校外の機関や専門家は？	特別支援教育

### ■ 3 大切にしたい教員自身の基本的姿勢

#### ① 学生への期待と教員自身の姿勢と態度

本学は対人援助の専門的職業人の養成を教育的使命の一つとしています。その専門性の中核にあるのは、人との信頼関係を築く力です。そこで、将来の専門的職業人の“候補生”たる本学学生に、人間に敬意と共感を持って接する態度、異なる背景や価値観を持つ相手を理解しようとする態度の大切さを伝えていきます。また、人間の弱さにも強さにも目を向け、可能性に開かれた建設的な発想をすること、柔軟でバランスの良い発想の大切さも伝えたいと考えています。さらには将来、自らの専門性を分かりやすく伝え、一方的で権威的な指導では無く、相手との関わりの中で専門性を発揮してもらいたいと願っています。

このように、学生とその将来に期待することは実に沢山あります。では、学生を指導する、私達教員はどうでしょうか？ 上記の諸点を、「かくあるべし」と指導するだけでは、教員側の期待や願いは十分に伝わりませんでした。そこで、専門的職業人の一人として、私達教員が良きロールモデルになることを重視しています。

そこで学生と向かい合うとき、「伝えたい大事なことは？」「そのために自分はどう振る舞うのか？」それを自問自答しながら、自身の態度や姿勢を振り返るように心がけています。(これまで大切にしてきた態度や姿勢を表2にまとめました。)

表2 授業場面における教員の基本姿勢と関与（主なもの）  
一部オンライン授業で実施困難な項目も含む

□01 学生の反応に目を向け、教員からも言語・非言語の反応を返す。
□02 適宜、ユーモアを用い、穏やかで話しやすい教室の雰囲気をつくる。
□03 教員から適度な自己開示をして、学生に親しみやすさを感じてもらう。
□04 教員自身の専門分野の臨床経験、実践経験を語る。
□05 学内で、授業以外の場でも学生に声をかける（挨拶・雑談・立ち話等）。
□06 たとえ模範解答でなくとも、発言の自発性や積極性を肯定的に評価する。
□07 自発的・積極的発言を「授業への協力」と位置づけ評価する。
□08 学生からの「質問・確認・援助の要請」を尊重し、丁寧に応じる。
□09 学生が即答できなくとも、対話を通じてヒントを与えていく。
□10 誤りを訂正する際にも、可能性に開かれた言い方をする。
□11 学生の名前を覚える努力を惜しまず、名前で呼べるようにする。
□12 適宜、授業中の教員の立ち位置や向きを変えてみる。
□13 適宜、机間指導を行い、学生の学習状況をモニタリングする。
□14 厳しい言い方をしたとしても、学生の自尊心を傷つける表現は避ける。
□15 授業の冒頭で、学習の目的、手順やプロセスをわかりやすく説明する。
□16 難易度の高い課題には、スモールステップをつくる。
□17 説明が「矢継ぎ早」にならないように、必要な「間」をとる。
□18 学生のレディネス・先行する経験・発達段階を配慮する。
□19 学生の語彙に配慮し、必要に応じて言い換えや補足的な説明を加える。
□20 「単語」で答える学生には、文としての構造を持つ言い方を求める。
□21 専門用語や理論の学習では、身近な話題に関連付けて説明する。
□22 他の科目との関連性にも言及する。
□23 学生が考える契機となる、問いかけ（発問）を幾つか用意しておく。
□24 対話を通じて、学生の思考のプロセスを促進・援助する。
□25 学生の話題提供（体験・実習・ボランティア活動等）を授業に活かす。
□26 必要に応じ授業の中で学生が役割を担う機会を用意する。
□27 新たな知識や技能を身に付け、課題を達成する喜びに教員も共感する。

## ②教育・研究そして学内業務にある教員の学びの機会

特別支援教育の研究や発達支援の実践経験を踏まえ、平成28年度より現在まで、障害学生アドバイザー（発達障害）を担当し、合理的配慮の検討及び各種相談を担当しています。この仕事は、私自身にとって、全ての学生に参加と達成の可能性を開く大学教育を考える貴重な機会となっています。ここ数年は、学生支援委員会とともに研修会を実施・担当し、そこでの学びを学内で発信・共有しています。

また、本学教員の求めに応じて、授業や学生指導に関するコンサルテーションを適宜行っています。これは一方的な助言ではなく、学生理解の在り方や教育実践の手だてを“ともに考える”共同的かつ相互的な関わりです。同僚と教育の質向上を考えることは、自らのそれを見つめ直すことにも繋がっています。

さらに、沢山の授業を見学してきました。本学へ着任以来、埼玉県内の諸学校でフィールドワークによる実践的研究を進めていますが、ここでは必ず授業参観をさせて頂いています。現場の教師の皆さんの、巧みな指導技術や創造的な取り組みの実例をこの眼で発見することは研究活動であると同時に、自身が一人の教育者として成長するための貴重な学びの機会となっています。ここに、感謝申し上げます。

（注）本資料は道学教師理事長賞の受賞決定後、ホームページでの学内・学外の公表を前提として、一部表現と構成に修正、内容に加筆修正を加えたものです。